

一九六三年ヴォーリス建築事務所による

同志社大学中央図書館設計

裕 居 宏 枝

はじめに

本稿は、同志社大学中央図書館の設計図面の資料紹介を通じ、これまで知られてこなかったヴォーリス建築事務所による建築計画について論じるものである。

一九六三（昭和三八）年に、ヴォーリス建築事務所によって設計された同志社大学中央図書館は、啓明館の東側の現在は光塩館が建つ場所に、啓明館と渡り廊下で結ぶよう建築計画された。この建物は、設計図面が残っているのみで、実際の建築までには至っていない。同様に、同志社からヴォーリス建築事務所に建築設計を依頼し、建築図面がひかれたものの建築まで至らなかつた例として、一九三五（昭和一〇）年同志社創立六〇周年記念事業時のキャンパス整備計画がある¹⁾。

同志社大学中央図書館の図面が作製されたとき、W・M・ヴォーリスは病床にあり、設計には関与していない²⁾。しかしながら、ヴォーリス建築事務所による同志社大学中央図書館設計は、同志社における図書館史、さらにヴォー

リズ建築史としても非常に重要であり、ここで改めて資料紹介し論じる必要がある。そこで本論では、同志社大学中央図書館の建築がどのような計画の中で始まり、その設計内容、そしてその計画はなぜ計画だけに終わったのか、関係者の回顧を中心に考察していきたい。

図書館の機能そのものや変遷、蔵書については、「同志社大学図書館のあゆみ」『びぶりおてか』³⁾「同志社百年史」⁴⁾、ならびに同志社大図書館ホームページの「図書館のあゆみ」⁵⁾にすでに詳しく、ここではあらためて詳細を述べることはしない。しかし、戦後の同志社の図書館の状況については、まずここで簡単に述べておきたい。戦後、学生数が増加し図書館（現在の啓明館⁶⁾）が手狭になったことにより、一九五七（昭和三二）年に啓明館東側の有隣館⁷⁾二階の教室を大閲覧室（約三五〇席）とし、蔵書の一部を開架設置した。さらに同年には、啓明館書庫の増築を行っている。それまで啓明館は北側に書庫棟、南側に本館があり、その間を渡り廊下でつないだ建物であった。このとき、啓明館の北東に新しく書庫が増築されたことにより啓明館は中庭をもつ現在の形となった。

同志社今出川キャンパスには、最初の図書室があった書籍館（現在の有終館⁸⁾）、二代目の図書館で現在の啓明館、そして二〇二二年現在使用されている同志社大学今出川図書館（以下、今出川図書館）の建物が現存している。過去二代の図書館は、図書館としての役目を終えた後もその建物は残り、それぞれ有終館、啓明館として、前者は法人に、後者は同志社大学の同志社社史資料センター、施設課、人文科学研究所に利用されている。現在の今出川図書館は、同志社創立一五〇周年を期して建て替えが予定されている。こちらの建物は解体されることが決まっており、館



写真① 1966（昭和41）年の有隣館、同志社社史資料センター所蔵

名がつけられることは一度もなく、「三代目図書館」はやがてその姿を消し、「四代目図書館」に代わるだろう。

一、同志社創立九〇周年記念事業の中の図書館計画

つぎに、同志社創立九〇周年記念事業の中で浮上した中央図書館建築計画についてみていきたい。

一九六〇（昭和三五）年八月一八日「長期計画修正草案」⁹⁾には、図書館の建築についての記述はない。翌一九六一（昭和三六）年一月の「同志社記念事業計画案」³⁶—1—27 改定案 と同志社理事長秦孝治郎の押印あり¹⁰⁾には、「資金の用途」のなかに諸学校ごとの内訳があり、大学の項目のなかに「図書館、研究室増築 一〇、〇〇〇万円」（一億円）計上されている。これは、創立九〇周年記念事業の中で図書館について初めて言及されたものである。同月一三日の校長会における、「図書館研究室増築費として六千八百万円が計上されているが、少い^マように思われる。一億円位計上してはどうか。少くとも五十年間は維持できる建物をたててい^マき度い」（昭和三六年度「校長会記録」）との意見が反映されたとみられる。

後年、図書館長原正は図書館についての回顧の中で、「新しい図書館を建てようという意見は、かれこれ一〇年前から聞かれ、その実現に向かって多くの努力が払われてきました」と述べている点とも時期が一致している。¹¹⁾同年二月の「同志社記念事業趣意書」¹²⁾には記述がみられないが、こちらは記念事業のさわりの部分だけで、詳細が書かれていないことによるものとみられる。

記念事業そのものが公になるのは、同年六月発行の『The Doshisha Times』¹³⁾掲載の秦による「創立九十周年記念事業に対するお願い」である。そこでは、「募金の計画」として、次のようにある。

同志社が大規模の寄付金を計画したのは、ちょうど二十六^ア年目である。昭和十年、湯浅総長時代に創立六十周年記念事業として金二百万円を企画した事があるが、それについて今日この計画を決意したのである。

これを見ると、創立九〇周年記念事業が創立六〇周年記念事業を念頭に計画されている様子が見て取れる。翌号の『The Doshisha Times』⁽¹⁴⁾に掲載されている「同志社記念事業委員会」の副委員長には、同志社評議会議長である湯浅八郎が名を連ねている。湯浅は、創立六〇周年記念事業が計画された時に総長事務取扱（一九三四（昭和九）年三月二六日）〜一九三五年二月一〇日）、のちに第一〇代総長（一九三五年二月一日）〜一九三七（昭和一二）年二月三十一日）を務め、記念事業をけん引し、ヴォーリズ建築事務所によるキャンパス整備計画を進めた中心人物である。⁽¹⁵⁾

一九六一年八月になると、その計画はさらに具体的となった。「同志社創立九十周年記念事業資金募集趣意書（抜粋）昭和三七年」⁽¹⁶⁾中には、「計画の内容（自昭和三十六年至昭和四十年）」のなかに諸学校ごとの内訳があり、大学の項目に「図書館、法・経・商各学部研究室増築 一〇〇、〇〇〇千円」、つまり一億円が計上されている。さらに翌一九六二（昭和三七）年の「創立九十周年記念事業の計画 昭和三七年一〇月改訂」⁽¹⁷⁾では、大学の項目のトップに「図書館」が掲載され、予算額は二五、四五〇万円となっており、前年の一億円から二・五四五倍に増額されている。この間、一九六二年五月二九日には田中良一による「同志社図書館の過去と現状」⁽¹⁸⁾が起草され、同年一月二七日には「中央図書館建築要望書」⁽¹⁹⁾が書かれ、現状の把握と建築に関しての要望がまとめられた。

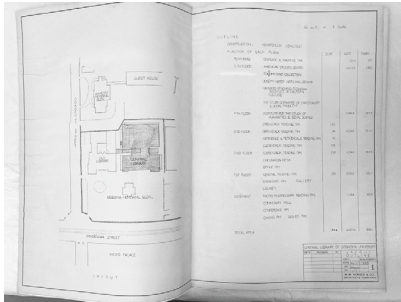
二億五四五〇万という膨大な予算が建築の障壁となったのだろうか。一九六四（昭和三九）年二月発行の『The Doshisha Times』⁽²⁰⁾では、「記念事業着々完成 中央図書館はいま計画中」との見出しが出た。この時すでに募金の目標額の八九％に達していたため、資金不足による建築計画中止の可能性は低い。ではなぜ図書館は完成しなかったの

か、疑問は残る。その謎を解く前に、本題でもあるヴォーリズ建築事務所設計の図書館について次節でみていきたい。

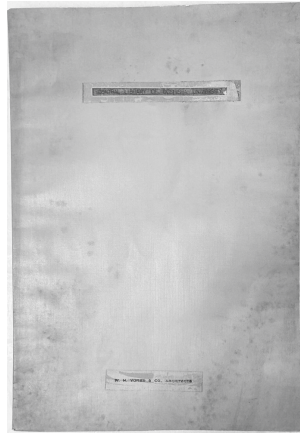
二、同志社大学中央図書館設計図面

中央図書館の設計図面は同志社大学同志社社史資料センターに二点所蔵されている^⑫。一点は一九六三年三月二五日付け(写真②)~⑥)、もう一点は一九六三年五月三一日付け(写真⑦)~⑪)で、それぞれ冊子の形態である。三月付けの図面には、訂正の書き込みが見られることから、三月付けの図面を修正し、五月付けの図面が作製されたとみられる。大きな修正は行われておらず、各部屋の名称の変更等にとどまるため、ここでは修正後の五月の図面を中心に紹介したい。

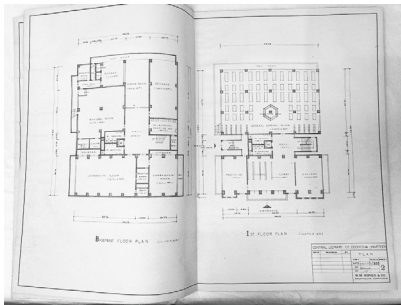
建物は地上五階、地下一階建てで、屋上には階段と機械室が設けられた。地階はホールを中心として、保管庫、マイクロフィルム閲覧室、コンファレンスルーム、コミュニティルーム、トイレ、ボイラー室、厨房、食堂が設けられた。一階は、正面入り口を入れてまずロッカーとロビーがあり、その右手には展示室、左手には自由閲覧室が設けられた。その奥の北側にある最も広い一般閲覧室との間には、階段室とホール、トイレが設けられた。西側には入口とは別に、職員用の入口もあった。二階北側の最も広い部屋は閉架閲覧室で、その一角に貸出・返却窓口が置かれた。そして、階段室とホール、トイレを挟んだ南側に事務室が設けられた。三階北側の一番広い部屋が閉架閲覧室で、一、二階と同じく階段室とホール、トイレを挟んで南側にレファレンス・定期刊行物閲覧室と開架閲覧室が設けられた。四階北側の最も広い部屋は開架閲覧室となり、階段室とホール、トイレを挟んだ南側には人文科学研究所 (Institute for the Study of Humanities & Social Science、以下、人文研) が置かれた。五階の北側の空間は四つに分けられ、



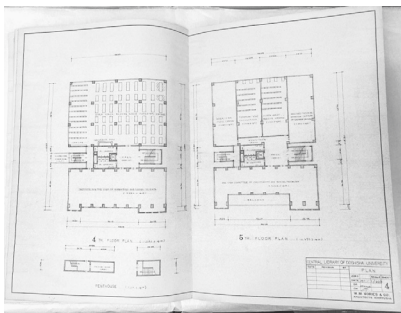
写真③ 概要・目次



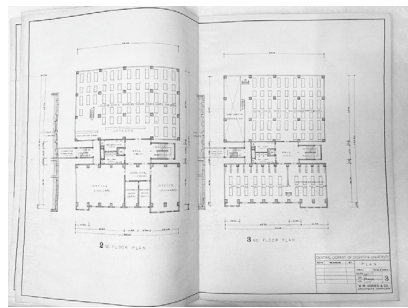
写真② 表紙



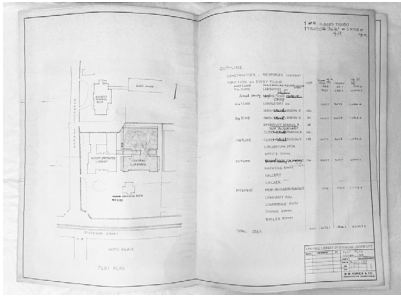
写真④ 地階・1階



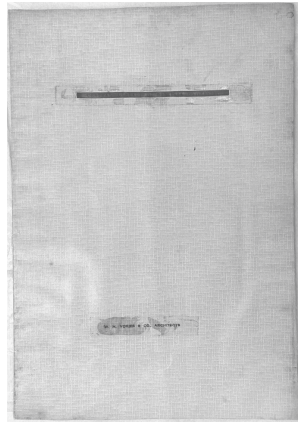
写真⑥ 4階・5階



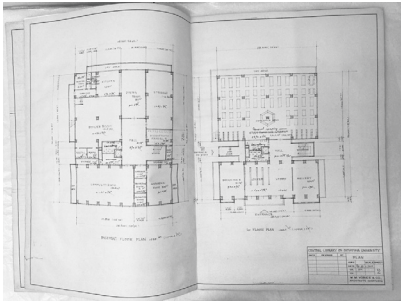
写真⑤ 2階・3階



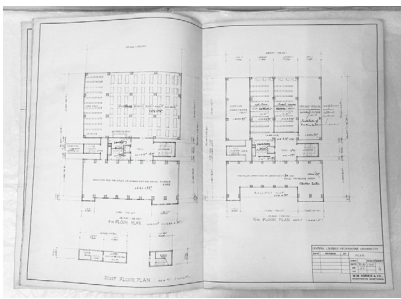
写真⑧ 概要・目次



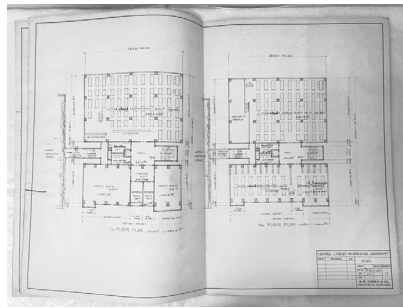
写真⑦ 表紙



写真⑨ 地階・1階



写真⑪ 4階・5階



写真⑩ 2階・3階

西側からアメリカ研究所 (American Studies Center)・徳富文庫 (Tokutomi Soho Collection)・新島記念文庫もしくは新島旧邸文庫、あるいはその両方 (Joseph Hardy Neesima Library)・ハーバード・燕京・同志社東方講座 (Harvard—Yenching—Doshisha Institute of Eastern Culture) の各部屋が設けられた。階段室、ホール、トイレを挟み、南側は最も広い部屋となり、キリスト教社会問題研究会 (The Study Committee of Christianity & Social Problem) の部屋となり、南側に面してここだけバルコニーが設けられた。

一階と地下には一部を除き、建物の周囲にドライエリアが設けられていることも興味深い。地下および一階を湿気から守るためと考えられる。また、二、三、四階の西側に啓明館との渡り廊下が設けられた。

人文研はこの頃、啓真館 (現在の今出川図書館付近) 北西のプレハブに置かれていた。⁽²³⁾ 一方、キリスト教社会問題研究会は一九五九 (昭和三四) 年に人文研の研究部門の一つとして統合され、啓明館東館の五階に研究室を設けていた。⁽²⁴⁾ 人文研の一部でありながらも、このとき別室を設けていたキリスト教社会問題研究会が、新図書館建設計画においても人文研から独立した研究室を設けていることが指摘できる。さらに興味深いのは、その研究室が人文研と同等の広さで計画されていることである。キリスト教社会問題研究会は今日も人文研の主要な研究分野の一つとなっており、独立した組織となっていない。しかしながらこの頃、キリスト教史に関する研究機関の設置が上がっていたことが、湯浅八郎宛て海老澤有道書簡⁽²⁵⁾から見る⁽²⁶⁾ことができる。その書簡において海老澤は、湯浅にあて同志社におけるキリスト教史編纂所のような機関の開設を希望している。特筆すべきはその書簡につけられた一九六四年の湯浅直筆のメモで、次のようにある。

この重要な忠告を受け入れて実行しなかった事は誠に申訳ない失策であったと思う。

一九六四、一、二六 湯浅八郎

ここには深い後悔の念が綴られている。同書簡が湯浅八郎文書中の「図書館二関スル資料」所収であることなどから、新図書館の建設が叶わなくなり、それに伴ってキリスト教史編纂所が開設できないことを自覚した湯浅の自責の念のあらわれ、ともとることができよう。キリスト教社会問題研究会が果たして海老澤や湯浅が構想したキリスト教史編纂所と一致するかなどの議論や、史料による詳細な分析は今後必要であるが、傍証として考えてよいだろう。湯浅のメモが図書館に設置予定のキリスト教に関する研究機関を意味しているとすれば、それは一九六四年のことであり、図書館建設計画が頓挫したのもまさにこの時期ということになる。この点について、その後の図書館建築をめぐる回顧を追いながら、次節で明らかにする。

三、その後の図書館建築計画の変遷

現在の今出川図書館の建築につながる動きは、一九六八（昭和四三）年「新図書館の建設」²⁷に詳しく見ることができ。執筆した図書館長小橋一郎によれば、

あたらしい図書館の建設計画が進められています。学長の熱意と、学内各方面の支持のもとに、大学においては、今出川校地烏丸今出川角地附近に、延三、〇〇〇坪、学生用座席数一、〇〇〇以上、書庫収蔵量五〇〇、〇〇〇冊の近代的な図書館を、昭和四三年度中に建設しようという計画が推進せられており、さらに法人理事会において

も、新図書館建設という基本方針が承認せられました

ここではすでに、ヴォーリス建築事務所が設計した図書館とは場所も異なる図書館建築構想が計画されていることがわかる。数年後、図書館長の原正は図書館建設について次のように述べている。⁽²⁾

新しい図書館を建てようという声は、かれこれ一〇年以上も前から、ささやかれていたように思う。しかし、これが正式に取り上げられるようになったのは昭和三八年度（上野学長、内田館長時代）であった。当初は、現図書館を増築改装という考え方が支配的であったようだが、種々検討していく段階で独立の大図書館構想が生れた（星名学長・金山館長時代）。昭和四二年秋（星名学長、小橋館長時代）には、部長会および大学評議会の議を経て理事会に新図書館の建設を要請し、それが認められて烏丸今出川角地の一部を整地するまでに至った。しかし止むをえざる諸般の事情により、その実現をみるに至らなかった。創立九〇周年事業の中にも図書館建設が挙げられながら、はかない青写真に終ってしまったことは、なんとしても口惜しいことであった。しかし、その後（齋藤代行・徳永館長時代）も、なんとかして障害をのりこえ新図書館を実現しようという努力がねばり強く続けられた。

これによれば、一九六三年七月一日に着任した第一五代学長上野直蔵の時に、新図書館建設が正式に取り上げられたという。しかし、前述したようにその二年前の一九六一年の同志社創立九〇周年記念事業のなかですでに取り上げられていることから、第一五代学長上野時代ではなく、第一四代学長上野時代の誤りであると考えられる。当初は啓明

館の図書館を増築改装する考え方が主流であった。独立した大図書館構想が生まれたのは、一九六六年一月一日に着任した星名泰学長の時代であった。しかしその計画も「止むをえざる諸般の事情」により頓挫している。ヴォーリズ建築事務所計画ではない今出川図書館の建設についてここで詳しく述べる必要はないが、今出川図書館の建設に至る歴史は、ヴォーリズ建築事務所計画から紐解かれていたため、看過できない。その一つが、一九七四年二月一日発行「新図書館建設にいたるまでの諸種の事情について」（同志社大学図書館報『びぶりおてか』No.15、六頁）である。左記に引用する。

新図書館建設にいたる道は、長い道程であった。その長い道程の中には、いろいろのことがあったが、そのなかのいくつかの事柄についてふれてみたい。

〈1〉検討体制について 昭和38年に Vorles による最初の設計案がだされて以来、昭和41年、42年と幾多の設計案乃至は試案がだされたがいずれも具現化にはいたらなかった。「幻の図書館」ともいわれたこともあったやに聞いている。

そのような状況の中で、なんとしても新図書館を建設せねばとのねばり強い、精力的な努力が続けられ、昭和44年4月には、図書館内に新図書館建築実行委員会が設けられ、新しい大学図書館の建設と改革に着手されることとなった。

これを見ても、一九六三年のヴォーリズ建築事務所による計画に図書館の建設が端を発するとされている。

それでは、ヴォーリズ建築事務所による図書館の建設がかなわなかったのはなぜであろうか。その理由が一つの決

定的な事由によるものではないことが、図書館長原正⁽²⁹⁾、河野仁昭⁽³⁰⁾、大学総務部長駒井四郎⁽³¹⁾の記述や証言からわかる。原は今出川図書館の竣工後にそれまでの経緯を振り返って、次のように述べている⁽³²⁾。

顧みるに、「同志社大学に新図書館を」という声やさ、やかれたのは、ずいぶん前のことであり、それは戦後における大学の急膨張に伴う当然の帰結でもあった。それ以来、歴代の学長や館長をはじめとする教職員各位のなみなみならぬ努力によって新図書館構想は次第に煮つまっていった。当初は旧図書館の増築案が支配的であったが、大学の規模や内容に見合った新図書館の必要性が痛感されるにおよび、独立の中央図書館構想へと移行していった。この間、新図書館建設は、創立九十周年記念事業の柱に挙げられると共に学費改訂（上野学長時代）と絡んでその実現が公約された。したがって大学としては、短期間のうちに成案をえて、これが実現に踏み切らざるをえない状況の中にあつた。幸い、この路線は星名学長によって受継がれ、新図書館建設の話は急速な進展をみるに至つた。しかし、肝腎の図書館設計について学内の意見調整が得られなかつたため、折角の建設計画は止むをえず一時頓挫せざるをえなかつた。そして大学は一九六九年の紛争へと突入して行き、図書館建設にとって誠に厳しい時代を迎えることになつた。新たに着任した山本学長は、新図書館建設の必要性を痛感され、これが実現を強力に推進された。

ここでも、図書は旧図書館の増築案が支配的であつたことが述べられている。さらに創立九〇周年記念事業の柱になつたことも前述した点と一致する。新しい情報として、上野学長時代の学費改訂と絡んだ公約として登場している。そして、それによって短期間に実現を迫られたことが指摘されている。また、増築案であつたヴォーリス建築事務所に

よる建築計画ののち、星名学長時代の新図書館建設計画が頓挫したのは、「学内の意見調整が得られなかったため」とされている。

続いて、河野仁昭の記述も左記に紹介しておきたい。⁽³³⁾

図書館の建築は、同志社大学の永年の懸案であった。それが日程にのぼるにいたったのは、昭和四十一年一月に星名泰教授が学長に就任してからであった。星名学長は建築の場所を現在の位置に定め、自ら私案までもつくってみせるほど、これに力を注いでいた。

大正九年三月に本館が竣工した旧図書館（現啓明館）は、戦後の学生増によって著しく手狭になったので、東隣りにあつた有隣館（昭和二十四年十月に竣工した二階建て）の、二階の大教室を臨時の閲覧室に転用して、書庫との間に橋をかけて通路にした。それらは防災上からも問題視されており、新図書館を要望する声がかまっていたのであつた。

気運はまさに熟していたのであつたが、着工に向かって動きだそうとした矢先に、学園紛争の波に襲われたのである。紛争が着工への進展を大きく妨げた。だから、山本浩三学長の時代に建設が具体化して新しい図書館が竣工したとき、もはや紛争の時代ではないことを、多くの人達が実感したのであつた。

ヴォーリズ建築事務所による建築計画は着工に向かって動き出す状況までに至っていないため、学園紛争の波に襲われて着工が妨げられた計画は少し後年の計画のことを指すと考えられる。ここで重要なのが、当時の図書館の状況を説明した箇所である。有隣館と書庫（啓明館）の間に橋を架けて通路にする計画が防災上問題であるとされているな

らば、ヴォーリズ建築事務所による図書館建設計画も橋を架けた通路が計画されており、現状ある問題を攻略できていない。あるいはその現状の問題点の指摘が増築案をあきらめさせる理由となっていたのかもしれない。いずれにせよ、ヴォーリズ建築事務所による建築計画は、初期に主流であった増築案に基づくものであり、増築案の廃案とともに消えたのである。

最後に駒井四郎の証言を挙げる。³⁴

駒井 大学会館を企画してやったのは実はほくなんです。あの当時、つまり大学生活というのは教室だけのものじゃない、やはり課外のいろんな活動といえますか、休む場所、あるいはディスカッションする場所、そういう施設が大学の教室以外に必要だということで、学生会館という問題が日本ではぼつぼついわれだしたんです。そのとき少し学生会館の問題について研究しまして、あれは学生というよりもむしろ学生部が提起した問題なんです。その当時図書館も必要なんですか、そういうことで学生会館をやるかというところで評議会当たりで論戦があつて、そのときに上野先生の勇断といえますか、そういうことで学生会館をつくった。その当時としては日本でもっとも大きな近代的なものだったんですね。そういうことにおいて同志社はほんとうに学生のことを考えて一歩先にやるということをやってきましたね。それで学生部は先生たちから批判をうけたことがあります。

この大学会館（学生会館）とは、一九六五（昭和四〇）年一月に開館した三代目の大学会館（学生会館）のことである。大学会館（学生会館）は校友や父兄、教職員などの寄付金や学債を基に建設され、総額七億円であったといわれる。設計は富家設計事務所、施工は清水建設株式会社であった。³⁵

原の証言は明確で、上野学長時代に評議会で図書館を建設する⁽³⁶⁾か学生会館（学生会館）を建設するかの論戦となり、上野の判断で学生会館（学生会館）を建設することになったことが述べられている。

おわりに

二代目の図書館の建物であった啓明館から、三代目の建物である現在の今出川図書館建築までの間に、ヴォーリス建築事務所による中央図書館建築計画があった。それは、今出川図書館の建設の端緒とされている。その計画の始まりは、一九六一年一月の同志社創立九〇周年記念事業計画案の中に図書館、研究室の建築として一億円計上されたことであった。その計画が公になったのは同年六月で、創立九〇周年募金事業は創立六〇周年記念事業を念頭において計画された。翌一九六二年一〇月には「図書館」として予算額が二・五四五倍に増額されている。その予算が確定したのちにヴォーリス建築事務所に図面作製の発注が行われたと考えられる。翌一九六三年三月にはヴォーリス建築事務所による最初の同志社中央図書館設計図面が作製され、部屋の名称に手を入れ修正が加えられた図面が五月に作製されたのである。この計画にかげりが見え始めるのは、作図の翌年の一九六四年である。駒井四郎の回顧によれば、図書館か学生会館（学生会館）を建築するかの論戦になったとき、学長上野直蔵の決断で図書館ではなく学生会館（学生会館）を建設することが決定した。一九六四年七月一日に学生会館（学生会館）本館の起工式が行われた。その二か月前の五月七日、同志社のカレッジソングを作詞し、新島遺品庫やアームストロング、啓明館などを同志社に残し、社友そして教員も務めた一柳米来留（W・M・ヴォーリス）が亡くなった。

一九六四年二月付の『The Doshisha Times』に「中央図書館いま計画中」の見出しが出ており、一見その計画

が順調に進捗しているかのように見える。しかしながらこの時、ヴォーリズ建築事務所による建築図面がすでに出来上がっているにもかかわらず、『The Doshisha Times』では「建築中」となっていることからわかるように、計画が進行しているというよりは、その語勢が弱まったととるべきであろう。

そして、湯浅が一九六四年に海老澤有道書簡に残したキリスト教史編纂所の設置不成立に関するメモも、図書館に置かれる予定であった研究所が頓挫した事を意味し、それが一九六四年であったことを補強するものとみることができると。

ヴォーリズ建築事務所設計の同志社大学中央図書館が建築されていたならば、新島遺品庫、啓明館、アーモスト館（付属屋含む）、致遠館とならんで中央図書館が建ち、同志社にヴォーリズ建築が集まる一角が正門周辺にできていたであろう。

〔注〕

- (1) ヴォーリズ建築事務所による同志社の幻の建築計画については、栢居宏枝、八木智生、星山真慶「同志社大学同志社社史資料センター所蔵『創立六十周年記念募金計画』改題」（『同志社談叢』第四二号、二〇二二年、一八九―二二三頁）を参照。
- (2) ヴォーリズは、一九五七（昭和三二）年ごろから体調を崩し療養生活に入っており、設計などに直接に従事することはかなわなくなっていた（田淵結「ヴォーリズと関西学院―重なり合うそれぞれのあゆみ」（山形政昭監修『ヴォーリズ建築の一〇〇年―恵みの居場所をつくる―』、二〇〇八年、一四二頁）。
- (3) 「同志社大学図書館の歴史（一）」（一五）（同志社大学図書館報『びおりおてか』No.1〜No.24、一九六七〜一九七八年）。無署名だが、執筆者は当時の閲覧課長での中に文学部で図書館学を担当した青木次彦である（『同志社談叢』第二八号、二〇〇八年、六五頁）。
- (4) 上野直蔵編『同志社百年史』通史編一、学校法人同志社、一九七九年、一五〇八―一五二六頁。
- (5) <https://library.doshisha.ac.jp/guide/outline/history/index.html> 二〇二二年八月八日最終閲覧。

(6) 啓明館の建物は、一九七三（昭和四八）年に現在の今出川図書館が開館するまで同志社大学の図書館であった。移転後、啓明館と命名された。

(7) 同志社営繕課の建築技師であった増田萬次は、有隣館について次のように回想している。「新制大学には大きな教室が必要だから、是非造って欲しいと教務から注文がありましたね。やはり愛知時計のつぶれた工場の古鉄骨を買ってきて、それをつなぎ合せて二階建てにしました」（インタビュー・ルーム 増田萬次氏（建築技師）に聴く「学校建築四十年」）（聴き手・河野仁昭）『同志社時報』第七一号、一九八一年三月）。河野は、「敗戦によって不要になった航空機格納庫用の鉄骨を買い入れ」（河野仁昭『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―」、同志社大学出版部、一九八五年、九四頁）、有隣館を建てたことを書いており、時計工場と航空機格納庫には接点がないように思われるが、愛知時計には航空機部門があり、それが一九四三（昭和一八）年に「愛知航空機株式会社」として独立しているのが、両者の証言・記述に矛盾はないと考えられる。

(8) かつてはハリス理化学校にも図書室があったし、また組織全体を包括した同志社の図書館であるのか、同志社大学の図書館であるのかなど、その機能によって初代から現在までの図書館の変遷を追うべきであるが、図書館の機能をもった建物として、初代から四代目までここで紹介した。

(9) 同志社大学同志社史資料センター所蔵「同志社長期計画修正草案」所収、A7/5/S35。

(10) 同志社大学同志社史資料センター所蔵「同志社九十周年記念事業計画案」所収、A7/5/S37。

(11) 原正「新図書館の建設について」（同志社大学広報委員会「同志社大学広報」No.50、一九七一年六月三〇日、一頁）。

(12) 同志社史資料センター所蔵、A7/5/S36。

(13) 『The Doshisha Times』第一二三号、同志社タイムス社、昭和三十六年六月一五日付、一面。

(14) 『The Doshisha Times』第一二四号、同志社タイムス社、昭和三十六年七月一五日付、一面。

(15) 前掲「同志社大学同志社史資料センター所蔵『創立六十周年記念募金計画』改題」参照。

(16) 同志社大学同志社史資料センター所蔵、A7/5/S37。九月付けの冊子「同志社創立九十周年記念事業資金募集趣意書」も同一内容である。

(17) 生島吉造編集、秦孝治郎発行『同志社時報』創刊号、同志社、一九六二年一月、五四頁。

(18) 同志社大学同志社史資料センター所蔵「同志社図書館の過去と現状」、C28&S37。田中良一文書「同志社図書館の過去と現状」

- 同所蔵、099/28、T9545-1 同一。
- (19) 同志社大学同志社史資料センター所蔵「中央図書館建築要望書」C28/8/S37。同所蔵「大学図書館関係書類」C28/3/S38-1 同一。
- (20) 『The Doshisha Times』第一五八号、同志社タイムス社、昭和十九年二月一日付、三面。
- (21) 同志社大学同志社史資料センター所蔵「CENTRAL LIBRARY OF DOSHISHA UNIVERSITY」A7/5/S37。
- (22) 『同志社大学 人文科学研究所の五〇年』、同志社大学人文科学研究所、一九九四年、一六頁。
- (23) 同右、一一二頁。
- (24) 同右、一八頁。
- (25) 海老澤有道は、一九二八(昭和三)年同志社中学卒業、一九三〇(昭和五)年同志社大学文学部予科中退のち、立教大学文学部予科三年に編入、一九三四年立教大学文学部史学科卒業後、一九三四年から一九四一(昭和一六)年まで同志社高等女学部教諭・女専講師であった。一九六〇年から立教大学教授、一九七六(昭和五一)年に定年後は国際基督教大学大学院教授を務めた(『海老澤有道先生追悼』『史苑』第五三巻第二号、一九九三年、七三頁)および「同志社人物誌(三六) 末光信三」(『同志社時報』第五一号、一九七四年、三二頁)。
- (26) 同志社大学同志社史資料センター所蔵「湯浅八郎文書(図書館ニ関スル資料)」Y/Y-H/S5-8。
- (27) 『新図書館の建設』(同志社大学図書館報『びぶりおてか』No.2、一九六八年二月一日、一頁)。
- (28) 『新図書館の建設について』(同志社大学図書館報『びぶりおてか』No.10、一九七一年一月一日、二頁)。
- (29) のちに同志社大学第二三代学長を務める。
- (30) 一九五三(昭和二八)年同志社入社、図書館、学生課長、文学部事務長などを経て、同志社史資料室長、文学部講師。
- (31) 駒井の経歴については、「インタビュー・ルーム 駒井四郎元大学総務部長に聞く 大学の本質を見据えて」(聞き手・河野仁昭)(『同志社時報』第九〇号、一九九〇年一月)参照。
- (32) 原正「同志社大学図書館のあゆみ」(同志社大学広報委員会編集、同志社大学通信特集号『同志社大学新図書館―竣工記念特集―』、同志社大学、一九七三年)
- (33) 河野仁昭『キャンパスの年輪』、同志社大学出版部、一九八五年、九二―九三頁。

- (34) 「鼎談 上野直藏先生を偲ぶ」(『同志社時報』第七八号、一九八五年三月、二七頁)。
- (35) 前掲『キャンパスの年輪』、九七―九八頁。
- (36) 同志社大学同志社社史資料センター所蔵「大学評議会記録」(以下)には記録がないため、学校法人同志社理事会か評議会でのことと
考えられる。